

学びを自己調整しながら書き進められる児童の育成

—国語科「書くこと」の領域における学習過程の工夫を通して—

石巻市立鹿又小学校 高橋 真実

1 授業づくりに関わる課題

(1) 今日の教育課題と授業づくりの課題から

『令和の日本型学校教育』において、「個別最適な学び」と「協働的な学び」とを一体的に充実させていくことの重要性が提言された。また、児童の特性や学習進度等に応じ、指導方法や教材、学習時間等を柔軟に設定することや一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することの必要性も指摘された。しかし、これまでの授業づくりを振り返ると、児童が自分の学びを調整したり、学習を振り返ったりするための手立ての工夫が不十分であった。

(2) 児童の実態

標準学力調査(令和6年4月実施)の結果、「書くこと」の学級の平均正答率は、全国比+5ポイント以上であった。しかし、意識調査の結果、文章を書くことを「得意ではない／どちらかといえば得意ではない」と答えた児童は、全体の半数を超え、「書くこと」に対する苦手意識がある児童が多い。与えられた課題には真面目に取り組むが、一度書き終えた文章を更に良くするために修正したり、発展的な課題に取り組もうとしたりする姿勢はあまり見られず、「書くこと」に対する意欲は、高いとは言えない。また、書きたいことを整理して文章の構成を考えたり、自力で書き進めたりすることが難しい児童も数名いる。

2 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

児童の思考力、判断力、表現力を伸ばすには、書くことに対する意欲や主体性を高める必要があると考える。そこで、学習計画を立てたり、学習方法を選択したりするなど、自分にとってより適切な学び方を考えながら学習を進める自己調整を行わせ、自分で書き進められる児童を育成することを目指し、そのための手立ての有効性を検証することを目的とする。本研究では、国語科「書くこと」の学習における「自己調整」について、次のように捉える。

- ・自分の文章表現について、教師や友達に意見を求め、よりよい表現を目指して修正すること。
- ・学習の進め方、共に学ぶ相手、使う資料などを考えながら学習を進めていること。

(2) 研究の方法

本研究では、「書くこと」に対する児童の意欲や主体性を高めるため、学習過程の工夫を手立てとして講じ、その有効性を検証するため、6学年児童25名を対象に、「書くこと」における児童の変容を、以下の方法で検証する。

- ・児童の学習計画表、構成メモ、文章の記述による児童の経過を見取る。
- ・事前と事後の意識調査の結果から変容を見取る。

3 授業実践Ⅰの取組

単元名：論の進め方を工夫して書く「いざという
ときのために」

(東京書籍 新しい国語六)

〔思考力、判断力、表現力等〕のB(1)イ「筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考えること」に重点を置く指導事項として設定した。

(1) 手立てについて

① 自分で学習方法を調整する場面の設定

ア 学習計画表の活用

児童が学習の見通しを持ち、主体的に学習に取り組めるようにするため、単元の導入段階で、自分の学習計画を作成させた。文章を書くための「構成⇒記述⇒推敲」の段階をどのような手順で、どの程度時間を掛けて行うか考えさせ、学習状況の把握にも活用した。

イ 自由な進度による学習過程の設定

「構成⇒記述⇒推敲」の段階（3時間）で、学習の進め方や時間配分、共に学ぶ相手などを児童に決めさせ、自分にとって適切な学び方を選択させると共に、学習状況に応じ、分からないところを友達に聞いたり、互いに教え合ったりする協働的な学びを促した。

② 自分の学習状況を振り返るための評価場面の設定

ア 推敲チェックリストの作成

見通す段階で、良い提案書の条件を学級全体で考えさせ、児童から出た意見と指導事項を照らし合わせた上で、教師がまとめ、「読み手に納得してもらえ文章チェックリスト」(図1)を作成した。記述の際に読み手に伝わるポイントとして意識して書けるように活用し、推敲の際には、児童がチェックリストとして活用し、観点に基づいてよりよい文章表現を目指すようにさせた。

イ 個人のめあての設定と振り返りの積み重ね

毎時間、個人のめあての設定と振り返りを行った。本時での自分の「書き表し方」「学び方」の2つの視点で振り返りをさせるようにした。

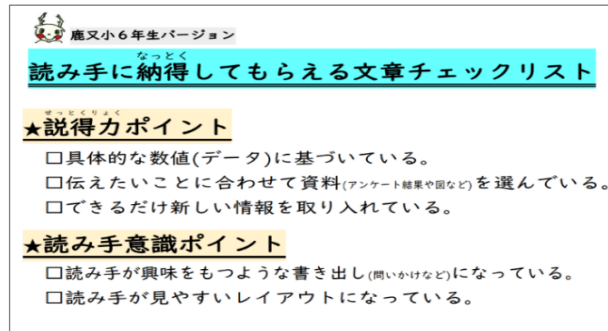


図1 読み手に納得してもらえる文章チェックリスト（授業実践Ⅰ）

(2) 授業実践Ⅰの成果と課題(○：成果 ●：課題)

① 自分で学習方法を調整する場面の設定

ア 学習計画表の活用

- 単元の始めに、自分で学習計画を立てさせたことで、書く過程3時間の見通しを持たせることができた。教師による一斉指導ではなく、学習過程を自分の学習進度で進められるように設定したことで、主体的に取り組む姿が見られた。
- 記述に時間が掛かった児童が多く、推敲の時間が十分ではなかった。推敲することの大切さを実感させ、学習状況に応じ、計画に修正を加え、書き表し方に関する気付きをメモさせると良かった。

イ 自由な進度による学習過程の設定

- 書く時間を30分程度確保し、児童が自由に机を移動して共に学ぶ相手や使う資料、時間配分などを決めさせるようにしたことで、自分にとって最適な学び方を考えながら進める姿が見られた。
 - 記述の段階では、書き出しや文章表現に迷った際に、近くの友達にすぐに相談する姿が見られた。振り返りでは、「友達に聞いて、もっといい意見が出た。」「友達に『この文章どうかな』などと聞き、どこを直したらいいか分かった。』といった記述が見られ、友達と学び合うことで、分からないところをそのままにせず、友達や教師に進んで相談する姿も見られるようになった。
 - 学習に必要な資料(学習の進め方、ループリック、個人のテーマ一覧、推敲チェックポイント)をオンラインストレージに保存しておくことで、児童が学習状況に合わせて、必要な情報にアクセスしながら自分のペースで学習を進めることができた。
 - 教師の見取りが不十分であった。本時で取り組む重点を明確にして単元を構成し、具体的にどこまで進めることを目指すかを確認する必要がある。
- #### ② 自分の学習状況を振り返るための評価場面の設定
- ##### ア 推敲チェックリストの作成
- 説得力を持たせるために資料を選んだり、表現

を工夫したりしながら作成する様子が見られた。また、多くの児童が、読み手を意識した書き出しを工夫することができた。

- 推敲の事前指導は行ったものの、指導後すぐに推敲の段階に入らない児童がいたため、実際にチェックリストを活用し、修正することにつなげることが不十分であった。「構成⇄記述」までを一区切りとし、「推敲⇄共有」を次の段階として行う学習過程を検討する必要がある。

イ 個人のめあての設定と振り返りの積み重ね

- 毎時間、めあての設定と振り返りを行ったことで、児童が本時に取り組むことが明確になり、めあての達成に向けた意識の高まりが感じられた。
- 児童が互いの学習計画や振り返りを見合い、助言し合う時間を設けることで、本時や次時で重点的に取り組むことがより明確になると考えられる。

4 授業実践Ⅱの取組

単元名：相手や目的に応じて情報を発信する「発信しよう、私たちのSDGs」

(東京書籍 新しい国語六)

〔思考力、判断力、表現力等〕のB(1)ア「目的や意図に応じて、感じたことや考えたことなどから書くことを選び、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝えたいことを明確にすること」に重点を置く指導事項として設定した。

(1) 手立てについて

① 自分で学習方法を調整する場面の設定

ア 学習計画表の活用

授業実践Ⅰと同様に、単元の導入段階で児童に学習計画を作成させた。本単元は、グループでの活動になることから、学習計画もグループで話し合うようにさせた。授業実践Ⅰの反省を踏まえ、推敲の時間を十分に確保するよう助言した。

イ 自由な進度による学習過程の設定

「情報収集⇄構成⇄記述⇄推敲」の段階(4時間)で、学習の進め方や時間配分、使う資料などを児童に決めさせた。学習を自分で進めるに当たって、必要な資料(学習の進め方、ループリック、グループのテーマと構成の一覧、推敲チェックポイント)をオンラインストレージに保存し、児童が学習状況に合わせて、必要な情報にアクセスしながら自分のペースで学習を進められるようにした。各グループのテーマや構成の一覧は、オンライン授業支援ソフトで見合うことができるようにし、他者参照を促した。また、授業実践Ⅰと同様に、分からないことや迷ったことがあれば、進んで友達に相談し、友達が困っていたら助言するよう声掛けし、児童同士の学び合いを促した。

② 自分の学習状況を振り返るための評価場面の設定

ア 推敲チェックリストの作成

単元の導入段階で、パンフレットの例を読み合い、より読み手に分かりやすいパンフレットの条件を学級全体で考えさせた。児童から出た意見と指導事項を照らし合わせた上で、教師がまとめ、「読み手に分かりやすいパンフレット(記事)チェックポイント」(図2)として、児童に提示した。授業実践Ⅰと同様、記述の際に読み手に伝わるポイントとして書けるようにし、推敲の際には、児童がチェックリストとして活用し、観点に基づいてよりよい文章表現を目指すようにした。

鹿又小6年生バージョン

読み手に分かりやすいパンフレット(記事)

すいこう
推敲チェックポイント

- ☐ 読み手が興味をもつような書き出し(クイズ・問いかけなど)になっている。
- ☐ 正しく、信頼できる情報を活用し、出典を書いている。
- ☐ 最も伝えたいことが伝わるように書いている。
- ☐ 記事が関連している(他の記事とつながりがある)。
- ☐ 伝えたいことに合わせて資料(アンケート結果や図など)を選んでいる。
- ☐ 分かりやすい言葉や表現を選び、むずかしい用語を使う場合は分かりやすい解説を入れるなど。

図2 読み手に分かりやすいパンフレット推敲チェックポイント(授業実践Ⅱ)

イ 個人のめあての設定と振り返りの積み重ね

授業実践Ⅰと同様、毎時間、個人のめあての設定と振り返りを行った。めあての設定は、グループの編集会議で行い、互いのめあてや振り返りを共有させた。振り返りは、本時での自分の「書き表し方」「学び方」の2つの視点に沿って行うようにさせた。

(2) 授業実践Ⅱの成果と課題(○：成果 ●：課題)

① 自分で学習方法を調整する場面の設定

ア 学習計画表の活用

○ 単元の導入段階で、「情報収集⇔構成⇔記述⇔推敲」(4時間)の進め方について、児童に計画を立てさせたことで、授業実践Ⅰと同様、主体的に取り組む姿が見られた(図3)。

● 学習状況に応じ

て、計画に修正を加えたり書き表し方に関する気付きをメモしたりするよう声掛けをしたが、十分に学習計画表を生かすことができていないグループが見られた。

イ 自由な進捗による学習過程の設定

○ 導入や学習の途中での教師による説明の時間を最小限にとどめるようにし、書く時間を25～30分確保したことで、児童が時間を掛けてじっくり書く時間を確保できた(表1)。さらに、児童が自由に机を移動して、共に学ぶ相手や使う資料、時間

配分などを決められるようにしたことで、分からないことや迷ったことを繰り返し友達に相談しながら書き進める姿が見られた。また、友達に助言することで、自分自身の書き表し方の推敲にもつながった。

表1 自由な進捗を重視した学習過程の例

時間	学習内容	形態
10～15分	本時の学習の進め方や書き方のポイントに関わる指導	一斉
5分	自分のめあてを立てる。 ※授業実践Ⅱでは編集会議	個人 ※グループ
20～25分	学習計画に基づき、自分のペースで書き進める。 学習状況に応じ、途中で全体への一斉指導を行う。	自由 (一斉)
5分	本時の振り返り	個人

- 学習に必要な資料(学習の進め方、ルーズリック、個人テーマ一覧、推敲チェックポイント)をオンラインストレージに保存し、児童がいつでも情報にアクセスできるようにしたことや図書資料などの学習環境を整えたことで、児童が必要な情報を自分で選び、活用しながら書き進めることができた。
- 自分のペースで書き進められる児童と書くことが苦手な児童との進捗差が生じた。書き表し方に迷った際は友達や教師に進んで相談するよう促したり、自分の記事を早く書き終えた児童にはグループの友達を中心にサポートをするよう助言したりしたが、単元の時数内で書き終えることが難しい児童も見られた。書くことが苦手な児童への個別の支援や関わり方を更に検討する必要がある。

② 自分の学習状況を振り返るための評価場面の設定

ア 推敲チェックリストの作成

○ 教科書の例文を基に、読み手に分かりやすいパンフレットの条件を考えさせたことで、書き出しを工夫したり、より説得力のある記事にするために適切な資料を選んだりする様子が見られた。

○ 「情報収集⇔構成⇔記述⇔推敲」(4時間)の4時間目は、推敲の時間として確保するようにさせた。学習進捗に差は見られたものの、ほとんどのグループが推敲の時間を確保し、チェックリストを活用して読み合い、修正することができた。完成した記事は、プリントアウトし、自分で読み直したり、互いに読み合ったりして、修正点をメモに書くようにさせ、よりよい文章やレイアウトになるよう修正させた。

イ 個人のめあての設定と振り返りの積み重ね

○ 毎時間、個人のめあての設定と振り返りを積み重ねたことで、前時の振り返りを次時に生かそうとする記述が見られるようになった(図4)。前時の反省を踏まえ、本時で何をどこまで進めるか、どのような学び方をするか考え、自己調整しながら学習を進める姿が見られるようになった。教師にとっては、めあてと振り返りの記述によって児

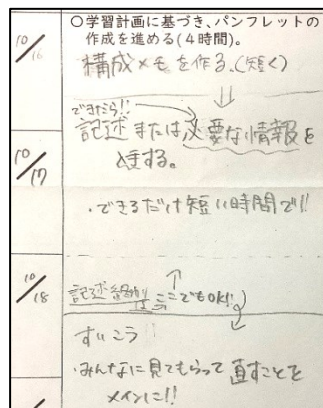


図3 児童が立てた学習計画

童の自己調整の見取りができた。また、グループの編集会議で本時のめあてを伝え合ったことで、互いの学習進度を確認させることもできた。

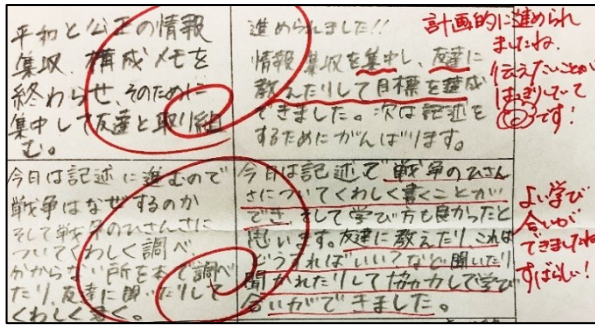


図4 児童の学習計画表のめあて(左)と振り返り(右)の記述

5 研究のまとめ

(1) 意識調査の結果から

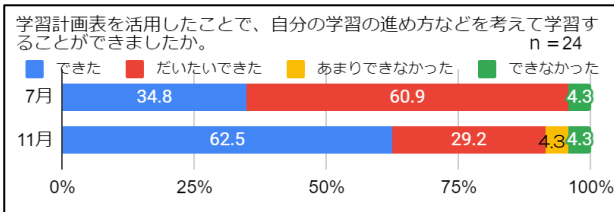


図5 意識調査の結果

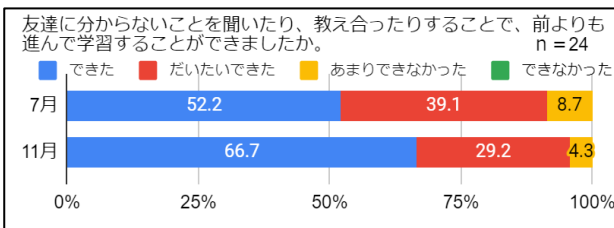


図6 意識調査の結果

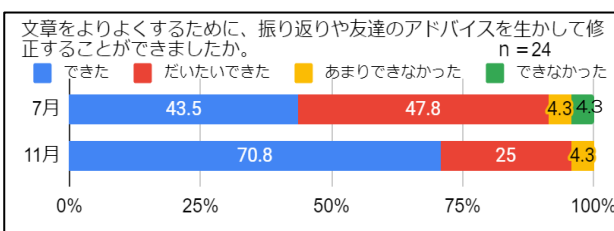


図7 意識調査の結果

① 自分で学習方法を調整する場の設定

意識調査の結果、「学習計画表を活用したことで、自分の学習の進め方などを考えて学習することができたか」(図5)という問いに対し、「できた／だいたいできた」と答えた児童は91.7%(7月比+4%)であったが、「できた」と答えた児童は62.5%(7月比+27.7%)と増えた。学習計画表の書き方に慣れ、本時のめあてや振り返りを短時間で書けるようになった。前時の振り返りを次時のめあてにつなげている児童が増え、授業実践Ⅰよりも学習計画表を活用する姿が見られるようになった。

「友達に分からないことを聞いたり、教え合った

りすることで、前よりも進んで学習することができたか」(図6)という問いに対しては、「できた／だいたいできた」と答えた児童は95.7%(7月比+4.4%)であった。学習計画表の振り返りには、「友達と教え合いながら書くことができた」といった記述が多く見られた。書くことに対して苦手意識の強い児童も、「分からないことを自分から聞くことができた」と回答していた。

② 自分の学習状況を振り返るための評価場面の設定

「文章をよりよくするために、振り返りや友達のアドバイスを生かして修正することができたか」(図7)という問いに対しては、「できた／だいたいできた」と答えた児童が95.8%(7月比+4.5%)であった。学習計画を作成した時点で、推敲の必要性を伝え、時間を十分確保させるようにしたこと、読み手としての意識が高まったことで、推敲に対する意識が高まったと考えられる。

(2) 研究の成果と課題

意識調査の結果や児童の学習の様子から、「書くこと」の学習過程の工夫における手立て①②は、児童が学びを自己調整しながら書き進められようにするための手立てとして有効であったと考える。

さらに、手立て①を講じる上で、児童が「書きたい」と思えるような題材を設定し、書く意欲と主体性を高めること、学習に必要な資料や学習の進め方についての説明資料を提示しておくことなどの事前準備や環境整備が、児童が自己調整するために必要であることが分かった。また、手立て②を講じる上で、誰に対して何のために書くのかという書く目的を明確にさせたことは、児童が読み手を意識しながら書き表し方を工夫し、主体的に書くことにつながることが分かった。これらについても成果と考える。

一方で、書くことに対する苦手意識の強い児童については、記事の作成過程で達成感を十分に得ることができなかった。自分で書き進めることが難しい児童に対し、学習方法の選択や教師の個別の働き掛け、友達との関わり方の工夫が必要である。

今後は、児童の自己調整しながら書き進められる力を高めるため、他学年において目指す姿や手立ての工夫を検討し、検証していきたい。また、書くことを苦手と感じている児童に対し、達成感を得られるような指導の手立てを検討するとともに、多くの児童が主体的に書くことができるようになるための指導法を研究していきたい。

【図表等の許諾について】

図3及び図4は、授業実践の中で児童が記入したワークシートの一部である。研究の目的にのみ使用することとし、児童の保護者及び所属校の校長から使用許諾を得た。